ルージュの奏で

要左之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルージュの奏で

【Ｎコード】
Ｎ３４９５Ｉ

【作者名】
要左之

【あらすじ】
曖昧で残酷な程、愛おしい。　※ＧＬ要素含みます。

第一話　かち合う視線

半年と二週間続いた幸せ。
時間はあっという間に過ぎ去るのに、
何故かとても長く感じられた日々だった。

『　かち合う視線　』

秋の雨はひどく冷たい。
真美は出来るだけ小走りでバス停へと向かう。
既に止まっていたバスに半ば駆け込むように乗り込んで一息吐いた。

「セーフ」

幸いバスの中に人の姿は無く、ほっとする。
声に出して小さくガッツポーズをすると運転手が言った。

「駆け込み乗車はご遠慮下さい」

バスを降りると外気が肌に突き刺さった。
思わず両手で頬に触れて目を閉じ、深々と溜息を吐く。

真美の目の前には大きな図書館が建っていて、
すぐ見開かれた目はその建物をじっと見据えていた。

そういえば、前もこの場所で。

外よりも幾分暖かい屋内。
真っ直ぐ文庫本コーナーへ足を進めればふと思い出す。

「真美は雑誌とか読まないの？」

「私は読まないよ。流行とか気にしないから」

二人でこの場所に来たことがあった。
陸也は雑誌コーナーで立ち読みばかりしていて、
一方の真美は文庫本コーナーで数冊の本を手に取り借りていた。

「活字は駄目だな。目が痛くなる」

そんな風に呟いた彼はまだ真美の心の中に居る。
陸也の苗字も仕事先もメールアドレスも真美は知らなかった。
それでも続いた関係は今も尚真美を縛り付けている。

ぼんやりしていた。

どん、と軽い衝撃が肩に伝わって危うく倒れそうになる。
このまま倒れてもいい、頭の隅で誰かが囁いた。
けれど力強い感触が両肩に触れると眠っていた意識が徐々に覚醒する。

「大丈夫、ですか」

漂う視線は緩々と上にのぼっていく。
わりと低い声が心地良いと感じてしまって。

薄い唇、通った鼻筋、そして。

かち合った視線は外されることなく、
(逸らすことは許さないと瞳が呟いていた)

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3495i/

ルージュの奏で

2010年10月28日04時43分発行